

保育者養成校における「園環境が育む子どもの感性と表現」の 授業プログラムの検討

～保育内容「表現」の授業を通して～

A study on a Lesson Program of “Sensibility and Expression of Children Nurtured
by Kindergarten Environments” at Childcare Worker Training School
～ Through Classes of Childcare Content “Expression” ～

土井 晶子
Akiko DOI

概要

本研究の目的は、保育内容－表現について「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業実践を通して、学生への課題からどのような授業を展開していくことが、学生の理解を深め、より深い学びとして身についていくのか、その効果を検討することである。本研究では、学生に課した「園環境が育む子どもの感性と表現」に関連する2つの課題を、「時間」「空間」「モノ」「人」という視点等から分類・集計し、その記述内容を分析した。その結果、課題①からは、ほとんどの学生が子どもの遊びと空間を捉えている内容の記述を行っており、園庭の環境を理解し、子どもの具体的な遊びをイメージすることができていることが分かる。また、課題②からは、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な環境の構成について、空間的視点が深く理解されていることが分かる。このことから、本研究での授業のねらいである子どもの豊かな感性と表現は、周囲の環境とのかかわりのなかで育まれることを理解し、保育実践者として意識をもって、「子どもの感性と表現」を育む園庭環境について考えることができるようになったと推測される。

キーワード：保育内容「表現」、豊かな感性と表現、保育者養成、園環境

Abstract

The purpose of this study is to examine, through lesson practice of childcare content – expression – “Sensibility and Expressions of Children Nurtured by Garden Environment”, what kinds lessons are appropriate to deepen the students' understanding so that they can acquire a deeper learning, and to confirm the effect of such lessons through the response to the tasks given to the students. In this study, the responses of two tasks concerning “Sensibility and Expressions of Children Nurtured by Kindergarten Environment” imposed to the students, were classified and tabulated from the points of view: “time”, “space”, “goods”, and “person”, in order to analyze the contents of the description. As a result, from task (1), as most students described the contents grasping the children's play and space, it was proved that they understand the environment of the garden and can image the concrete play of children. And, from task (2), it was proved that the students understand deeply about the composition of various environments enriching the sensitivity and creativity of children, from the point of view of space. From the mentioned above, it can be considered that the students understand the aim of the lesson in this study, i.e., children's rich sensibilities and expressions are bred in relation to the surrounding environment, and can think about the garden environment that fosters “Sensibility and Expression of Children” with consciousness as a childcare practitioner.

Keywords: Childcare Content “Expression”, Rich Sensibility and Expression, Childcare Worker Training, Kindergarten Environment

1. 研究の背景

幼児期の豊かな感性と表現は、領域「表現」などで示されているように、幼稚園・保育所等の生活場面で美しいものや心を動かす出来事に触れてイメージを豊かにし、表現に関わる経験や楽しさを積み重ねながら、育まれていく(文部科学省, 2017)。つまり、子どもの豊かな感性と表現は、周囲の環境とのかかわりのなかで育まれる。そして、「子どもは豊かな感性の下地になるものは持って生まれると言われているが、それを発揮させ、さらに育てるのが保育者の役割である。感性を育てることは、表現を育てることである(浜口, 2008)」。

このように、子どもが周囲の環境に主体的にかかわる活動において、子どもの表現を広くとらえ、その過程を大切にしていける姿勢が保育者には求められる。また、保育者自身は、子どもが感じ取るものとしての環境を意識するとともに、豊かな感性をもち、日々の生活のなかにある美しさや面白さをきめこまやかに感じ取って、子どもたちに伝えていくことが重要となる。そして、保育者には、子どもが表現しやすく、またしたいと思えるように、場や物などの環境を適切にかつ柔軟に構成することも求められる(小林, 2010)。

保育者養成校の「保育内容(表現)」の授業では、これらのことを踏まえて、子どもの感性と表現を豊かに育む保育環境について、学生が考えることができるようになるための授業展開が必要であると考え。そこで、「保育内容－表現」について、授業実践の意義、内容、課題に着目し、学習者の創造性を涵養する「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業プログラムを試みる。

2. 研究の目的

2.1 研究目的

本研究では、『保育内容－表現』について、「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業実践を通しての課題からどのような授業を展開していくことが学生の理解を深め、より深い学びとして身についていくのかを、その効果を検討した。学習者の創造性を涵養する「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業プログラムの検討を行う。

2.2 課題概要

課題①では、大学の敷地内にあるこども園の園庭を見学し、心に留めた場所を選び、写真を撮り、その理由を述べる。保育者自身に好きな場所があり、「単に好きだから」とか「何となく」といった曖昧な理由ではなく、その理由を明確に述べるので、意図をもって保育を展開していく上で重要だと考える。

課題②では、自分が園長であると仮定し、「子どもの感性と表現」を育む園庭環境を考える。この課題は、大学構内に隣接するこども園の園庭を見学し、実際の園庭環境を見学することで、具体的な指導場面を想定した「子どもの感性と表現」育む園庭環境を考える取り組みである。

3. 研究の方法

3.1 研究対象

本研究は、保育者養成校のS大学で、筆者が担当している以下の授業を用いて行っている。

科目名：保育内容－表現（平成29年4月～9月）

履修学生：1年生 17名，2年生 24名，計41名

分析対象は、授業終了後に課した学生への2つの課題である。

課題① 授業で見学したこども園で、心に留めた場所を選び、写真を撮り、その理由を述べる。

課題② 自分が園長になったつもりで、「子どもの感性と表現」を育む園環境を考えてみよう。

3.2 倫理的配慮

本研究の実施においては、履修学生に研究の趣旨説明等を行い、インフォームドコンセントで研究への同意の承諾をしてもらう。また、特定の学生のデータを取り扱うときは匿名化を図り、データ結果の集計・分析を行う。

3.3 「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業実施の概要

第6回，第12回，第13回（振り返り）に「園環境が育む子どもの感性と表現」についての授業を以下の通り実施した。

(1) 第6回「環境が育む子どもの感性と表現」

第6回の授業のねらいと内容は、表3-1に示すとおりである。

表3-1 第6回「環境が育む子どもの感性と表現」

<p>(ねらい) 子どもの豊かな感性と表現は、周囲の環境とのかかわりのなかで育まれることを理解する。</p> <p>(授業内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子どもの豊かな感性と表現を育む環境」を、時間・空間・モノ・情報・人という視点から具体的に保育環境を考える。 ・イタリア、レッジョ・エミリア市の保育実践「レッジョ・エミリアの幼児教育1～驚くべき学びの世界[モノとの対話]～」を通して、豊かな表現を導く保育環境を考える。DVDを視聴しながら、各年齢の保育実践をノートにまとめる。 ・各年齢の保育実践について全体で振り返りを行う。
--

(2) 第12回「園庭環境が育む『子どもの感性と表現』」

第12回の授業のねらいと内容は、表3-2に示すとおりである。

表3-2 第12回「園庭環境が育む『子どもの感性と表現』」

<p>(ねらい) 自分だったらどうするという意識をもって、「子どもの感性と表現を」を育む園庭環境について考えることができるようになる。</p> <p>(授業内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子どもの感性と表現」を育む4つの保育事例（小林他，2010），1）ダイナミックな環境をいかした園，2）家庭との連携を大切にした園，3）豊かな自然環境を生かした園，4）子どもの多様なかかわりを重視した園を挙げる。また、保育者の援助の視点から「心をとめる」（川邊，2017）の事例から子どもたちが日常の中で子どもの考えていること，感じていることを考える。 ・その後、大学構内にある付属の認定こども園の園庭に行き、実際の園庭環境を観察する。その際に園庭での子どもの遊びがイメージできるように、園庭の遊具や自然環境エリアなどの配置等について、説明を行う。その次に、各々学生が「子どもの感性と表現を育める園庭環」について考えながら、「自分ならここでこんな活動を展開するな」とか、「子どもはここでこんな遊びをするだろうな」など、子どもの園庭での活動をイメージしながら、自身が気に入った場所の写真を撮る。 ・大学構内で、自身の気に入っている場所や子どもたちを散歩に連れていきたい場所を考え、その場所を写真に撮る。その際に、担当教員のお気に入りの場所である「ビオトープ」を紹介する。ビオトープは、自然の生態系を身近に感じられる空間であり、メダカやアメンボなど決して目立つ生物ではないが、ここでは生物の自然な営みを感じることができると自身のビオトープを選んだ理由を話す。 ・教室に戻り、課題①②の説明を行う。
--

(3) 第13回「前週の振り返り」

第13回の授業で「園環境が育む子どもの感性と表現」に関連する内容は、表3-3に示すとおりである。

表3-3 第13回「前週の振り返り」

・初めの15分間で、前回の振り返りとして、各自が課題①「どんな場所を選び、写真を撮ったか」を発表する。

3.4 本研究における「子どもの豊かな感性と表現を育む環境」の視点

幼児の豊かな感性は、幼児期が身近に環境と十分に関わり、そこで心を揺さぶられ、何かを感じ、考えさせられるようなものに出会って、感動を得て、その感動を友達や教師と共有し、感じたことを様々な表現することによって、一層磨かれていく。そのために、興味や関心を抱き、主体的に関われるような環境が大切である(2017, 文部科学省)。そこで本研究では、子どもの豊かな感性と表現を育む環境を「時間」「空間」「モノ」「人」という視点から具体的に考えていく。

(1) 時間

幼稚園や保育所、子ども園では、登園後、遊びを中心とした生活のなかで時間が流れていく。保育において子どもの豊かな感性と表現を育むためには、子どもが納得して遊びに取り組む時間の保障が必要である(小林, 2010)。具体的には、意欲的に遊べる十分な時間の保障と、一日の生活の流れを切断しないことである。

(2) 空間

保育の場として空間は、基本的に子どもが主体であることが第一の条件である(小林, 2010)。そして、発達に応じた必要な経験を促す空間がつくられているかが重要になってくる。保育の場としての空間は、「保育室をレイアウトするのと同様に、子どもの姿を予測しながら遊び空間の特徴づけをして、さまざまな遊びの空間を戸外にも作るようにする(田代, 2009)」。

子どもの遊び空間について、仙田(1992)は、「6つの原空間(自然スペース、オープンスペース、道スペース、アナーキースペース、アジトスペース、道具スペース)が必要である」と述べている。子どもの遊びの6つの原空間は、表3-4に示すとおりである。

表3-4 6つの原空間

自然スペース	木、草花、水、生き物など自然豊かな空間。
オープンスペース	広がりがあり、ルールある運動遊びやボール遊びなどを可能にするオープンな空間。
道スペース	他の場所へつながっている、歩くこと、通ることとあそびが融合する空間。
アナーキースペース	廃材など工事現場のような、ある意味で混乱した空間。
アジトスペース	隠れ家や秘密基地のような誰もが知らない空間。
遊具スペース	あそびのシンボルで、あそびのきっかけをつくる装置の空間。

(3) モノ

身体を通した自然物とのかかわりは、生物として本来備えている人間の豊かな感性と表現力を呼び覚ましてくれる。また、その体験は、自然環境とのかかわる力を育み、かつ自然物を代用するモノの新たな創造(表現)へと将来的に導いてくれる(小林, 2010)。そして、子どもの向けにつくられた人工物だけでなく、日常生活のなかで使われているさまざまな人工物にも目を向け、保育のモノ環境として活用していくことも大切である。また、園環境としてさまざまなモノ(自然物・人工物)の組み合わせて使うことで、創作意欲が沸きあがることもある。

(4) 人

子どもは自分なりの表現がまわりの人から受け止められることにより、安心し、喜びを感じ、表現することに意欲的になっていく。子どもたちの表現したい意欲を支えることは、保育者の大切な役割である。また、子ども同士のかかわりのなかで共存感覚を味わいながら感動体験を積み、表現の楽しさを実感していくことの重要性を示している(小林, 2010)。

3.5 分析方法

「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業の学生への課題からその効果を検討するため、以下の(1)～(2)の方法を用いることとした。

(1) 課題①の分析

課題①については、こども園の見学時に説明を行い、「園庭で心に留めた場所を選びとその理由を説明する」という課題を課した。そして、選んだ場所を場所毎に分類・集計し、その理由について分析をした。

(2) 課題②の分析

授業終了時、「子どもの感性と表現を育む園環境」を考えるため、「自分が園長になったつもりで、『子どもの感性と表現』を育む園庭環境を考えてみよう」という課題を課した。この課題①の記述回答を、「時間」「空間」「モノ」「人」という視点から分類・集計し、内容を分析した。

4. 結果と考察

課題①、課題②の順で、「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業の学生への課題からその効果を検討する。

4.1 課題①の分析

(1) 園庭で選んだ場所

表 4-1 には、大学の敷地内にあるこども園の園庭を見学し、心に留めた場所の回答を分類・集計し示している。園庭の大部分を占めている木製の総合遊具(写真 4-1)を選んだ学生が全体の 4 割以上の 18 名いた。その中で、3 方向をボルダリング等の壁などで囲われた真ん中に大きな大木が植わっているデッキ下の部分を選んだ学生が 6 名 (15%)、木製の総合遊具そのものを選んだ学生が 4 名 (10%)、デッキの上の部分から数メートル離れた木に掛かっている縄で作られた橋(写真 4-2)を選んだ学生は 4 名(10%)、ボルダリングの壁(写真 4-3)は選んだ学生は 2 名 (5%)、ネットが張られている部分を選んだ学生も 2 名 (5%) いた。

次に横たわる大木(写真 4-4)を選んだ学生は 9 名 (22%)、築山(写真 4-5)を選んだ学生は 5 名 (12%)、草木等植物が生えている場所または、育てている場所を選んだ学生は 3 名 (7%)、泥遊びの痕跡を選んだ学生は 2 名 (5%)、テーブルと椅子 2 名 (5%)、ウッドデッキ 2 名 (5%) であった。



総合遊具の下部の隠れ家

写真 4-1 総合遊具

表 4-1 園庭で選んだ場所の内訳

総合遊具18(44%)					横たわる大木	築山5(12%)		草木等植物3(7%)		泥遊びの痕跡	テーブルと椅子	ウッドデッキ
下部の隠れ家	全般	縄で作られた橋	ボルダリング(壁)	ネット部分		トンネル	全般	生えている植物	育てている植物			
6(15%)	4(10%)	4(10%)	2(5%)	2(5%)	9(22%)	4(10%)	1(2%)	2(5%)	1(2%)	2(5%)	2(5%)	2(5%)



写真 4-2 縄で作られた橋

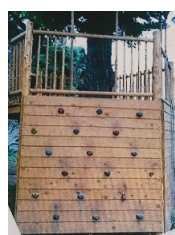


写真 4-3 ボルダリング



写真 4-4 横たわる大木



写真 4-5 築山とトンネル

表 4-2 には、前述した場所を選んだ理由を示している。選んだ理由として、自身の好きな空間ということが理由として挙がっていたが、下線のように保育者実践者としての視点から捉えている内容も多く見受けられた。園庭の環境を理解し、子どもの具体的な遊びをイメージすることができていることが分かる。また、同じ場所を選んでもそれぞれが選んだ理由や保育実践の構想も異なっている意見もあった。

表 4-2 選んだ理由

総合遊具	<p>（下部の隠れ家）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私がこども園の園庭で心に留めた場所は、ボルダリングなどが壁についている遊具の下です。木が突き抜けており、子どもの大きさなら木と壁の隙間に入り込めるところや、空間自体に秘密基地のようなワクワク感を感じました。ここに<u>台などを置いて、ごっこ遊びをして、自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、お友達と落ち着いて話をしたりすることができる</u>と思います。 ・総合遊具のデッキの下の薄暗くて少し広い空間が好きです。なぜなら、狭すぎず、かと言って立つことはできないちょうどいい広さで通気性も良くとても居心地がよいからです。また、<u>これからの時期日差しを遮り暑さを軽減してくれるので、この下で泥団子を作るのも楽しそうだ</u>と思いました。 <p>（全般）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段こども園の様子を外から見ていて、園庭の中でこの遊具の存在感がとても大きいように感じていた。<u>ただ登ったり渡ったりするだけではなく、ごっこ遊びの場になるなど、この遊具が子どもたちの遊びの中心にあるのではないかと考える。</u> ・上に登るという1つの目的でも、それまでの登り方が何通りもあり、自身の好きなように登れる。また、<u>細い枝をくくり、登った後も楽しめ、年齢が高くなっても飽きない。</u> <p>（縄で作られた橋）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・嫌なことがあったときに、このハンモックで寝て、空を見ることができるので、この場所にしました。←橋をハンモックだと思っている。 <p>（ボルダリングの壁）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私がこの遊具を選んだ理由は、時代・流行に沿っていて珍しいと思ったからです。ボルダリングは、腕と足の力と頭も使うスポーツです。 ・地面から、工夫して登って上まで行く達成感が味わえて良かった。<u>登る時に、どう行ったら早く上まで、たどり着くかなど園児が考えられて、思考力が上がる</u>と思う。<u>上に登ることができたら、友達と楽しく、おしゃべりをしたりできて、楽しそうだと感じた。</u> <p>（ネット部分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この場所を選んだ理由は2つある。1つは、このネットが柔らかい素材でできているということである。一見固そうに見えるが、触ってみたら思っていたよりも柔らかく、ここで遊ぶ子どもたちのケガ防止、安全対策になっていると思ったからである。2つ目は、ここでの様々な遊び方が想像できたからである。<u>上に登って立ってみるのもよし、下からぶら下がってみるのもよし、子どもたちが自分で楽しい遊び方を工夫できるのではないと思った。</u>
築山	<ul style="list-style-type: none"> ・土で小さな山が作ってあって、その中に土管を通して。土管からは、反対側にむけられるようになっていて、<u>友達同士で手を振ったりすることができる。子どもの体格であれば、中を通して楽しめる。また、かくれんぼでは中に隠れたり、鬼ごっこでは鬼をまくことができるのではないと思う。</u> ・（トンネルに）保育者は入ることができないので、子どもだけの<u>秘密の空間</u>のようでワクワクするから。
横たわる大木	<ul style="list-style-type: none"> ・この園庭は、色々な工夫がされてあり<u>子どもたちの低い視線から見たらとても面白いものばかりだ</u>と感じた。この木は筒抜けで<u>あり向こう側にいるお友達と覗き合い会話ができるから楽しい</u>と思った。また、くぐり抜けて鬼ごっこなどするのは最適だと思う。ここは狭い空間なので自然を感じながらひとりになれる場所でもあったと思った。 ・木の中に穴が空いていて、大人では通り抜けできない空間だったので、<u>子どもたちだけの世界が中で繰り広げられる気がして良かった</u>。両端に立って穴を覗くと、位置を調節しながらでないと相手の顔が見えなかった。中は暗かったので、<u>子どもたちが中に入るといろいろな感情（怖い、暗い、声が響く、隠れ家、楽しいなど）が生まれる気がした。かくれんぼなどの遊びにも使えるような場所だった。</u>
草木等植物	<ul style="list-style-type: none"> ・こども園内はとても自然が豊かになるようにと木が植えてあったり、お花が植えてあったりしていた。その中でもここは、トトロのメイちゃんを通る道にみえてすごくウキウキしたため選んだ。きっと<u>子どもたちは、この道を歩くときは探偵、またあるときは動物のように想像を膨らませているのだろう</u>と思った。
泥遊びの痕跡	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身、幼稚園の頃は毎日のように泥遊びをしていました。思わず懐かしくなり、この写真を撮りました。私の経験から、<u>土は幼少期の子どもたちにとって大きな役割を果たしている</u>と思います。日に当たった土はあたたかくなって、自然のヒーターになります。水を含んだ土は重たくなって、それをかき混ぜたり練ったりすると粘土のようになって土に光沢ができます。土がもたらす変化は、体力がつくとともに心の発達にも繋がっていると思います。大人にとって園庭は小さく見えるけど、<u>子どもにとっては日々の成長の中で、大きな発見と自分を見つめるチャンスを持てる場である</u>と思いました。
テーブル椅子	<ul style="list-style-type: none"> ・私がこども園で一番気に入った場所は、机と椅子があるところである。この場所で、<u>家族ごっこやお店屋さんごっこなどの「ごっこ遊び」</u>ができるからだ。また、<u>草や葉などをすりつぶして色水を作ったり、作った色水で絵を描くことができる。</u>
ウッドデッキ	<ul style="list-style-type: none"> ・木(自然)に密接している所が凄く素敵だと感じた。子どもが<u>自由に遊びを工夫できる</u>ようになっていると感じたからだ。例えば、ウッドデッキに座りおままごとや、細かい木によじ登ることができる。子どもたちの発想次第で、大人には想像のつかない遊びを発展できる場所だと感じ選んだ。

注：表 4-2 の記述は原文のままである。

第13回目の授業の初めにこの課題の発表をした。そして、その日の振り返りシートのコメントに「人それぞれの価値観によってお気に入りの場所と感じる場所は異なる。同じお気に入りの場所であっても理由は様々である。課題発表でお気に入りの場所と理由をきいて、とても関心深かった。私と同じ場所を選んで人がいたが、理由が違うものだった。その価値観が面白いと感じた」と記述があった。保育者を目指す学生自身が、身近にお気に入りの場所や気になる場所があることは大切なことである。また、保育者自身に好きな場所があり、その理由を明確に述べるができることは、思いや意図をもって保育展開できるのではないかと考える。

4.2 課題②の回答分析

(1) 「子どもの感性と表現」を育む園環境を考える

学生の課題の記述から本授業の効果を検討するために、まず、問1について、「時間」「空間」「モノ」「人」という視点から分類し、記述内容を分析した。表4-5には、問1「自分が園長になったつもりで、『子どもの感性と表現』を育む園庭環境を考えてみよう」の記述を視点に基づいた分類結果を示している。今回の課題提出者40名全員が「子どもの感性と表現」を育む園環境を空間の視点から考えていた。その中でも、37名(93%)が自然スペース、23名(56%)が遊具スペース、17名(43%)がオープンスペース、2名(5%)と少数ではあるが道スペース、アジトスペース、保育室を記述した学生いた。自然スペースは6つの原空間のなかで最も重要である(仙田, 1992)。このような空間では、子どもは虫と出会ったり、植物を採って遊びに使ったり、豊かな自然体験を積み重ねていくことができる。また、生き物と触れ合う、不思議を発見する、水や泥や砂を通じて創造力を発揮する等、子どもたちの感性を磨いていく空間でもある。

次に、モノとの関わりの視点から、17名(43%)が自然物について、13名(33%)が人工物について記述があった。人との関わりの視点から、6名(15%)が友だちについて、3名(8%)が保育者の援助について記述があった。また、時間の視点から1名(3%)の記述があった。

表4-5 「子どもの感性と表現」を育む園環境を考える *計40名学生が回答

時間	空間							モノ		人		
	戸外						室内	人工物	自然	保育者	友だち	その他
	自然	オープン	道	アナーキー	アジト	遊具	保育室					
1(3%)	37(93%)	17(43%)	2(5%)	0	2(5%)	23(56%)	2(5%)	13(33%)	17(43%)	3(8%)	6(15%)	0

表4-6には、具体的な回答例の一部を示している。Aさんは、具体的な四季を感じる植物を植えるなど自然との対話を考えた構想している。また、子どもの挑戦できるような遊具作りも提案している。Bさんは、自然スペースを中心とした保育環境に、自然物と人工物を融合したモノ環境を備える構想している。また、一般的には室内での遊びで絵本やモノレールなどの戸外遊びを提案している。Cさんは、遊具スペース、自然スペースにプラスして、自然物を使った工作ができるような空間の提案をしている。第6回目の授業の「レッジョ・エミリア市の保育実践」を生かした提案であると考えられる。

表4-6 具体的な回答例

Aさん	<ul style="list-style-type: none"> ・四季折々の植物や木を植える。例)桜, イチョウ, ひまわり ・平坦な作りにしないで、でこぼこな地面にする ・裏山に基地を作るのも楽しそうだが、裏山が近くにあるところがないから、園で飼っているウサギなどの動物の餌をみんなで手作りする。 ・幅広い年齢層がお互に関われるようにする。 ・自然に囲まれている園 ・ハザードはダメだが、多少のリスクを含んだ遊びができるような遊具をつくる。
-----	--

Bさん	<p>[自然とおもちゃが一体となって子どもの感性を豊かにできる園]</p> <p>自然の中で、土に触れ、木々や花々を愛でたり、摘んだりすることは、子どもの感受性を豊かにしてくれます。自然から生きる知恵を学び、虫・動物・人間たちが共に過ごしているのだということを自身の体験から確かめることができます。この中に、私は、“作られているモノ”が融合していても良いと考えます。外遊び、室内遊びと分けられますが、私は外で絵本をゆっくり読んでもいいし、モノレールを走らせてもいいと思います。遊び方にとらわれることなく、子どもたちがしたいことをしたい場所で行える園環境を整えていけたらいいと思いました。</p>
Cさん	<p>自ら遊びを展開し、創り出していけるような園環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランコやすべり台など、初めからできあがっている遊具を設置する場所と、何もない土の地面の両方の場所をつくる。子どもたちの好きなように組み立ててもらえるように、木の板やくぎ等置いておくだけにする。 <p>「キレイだね」「つめたいね」「やわらかいね」など声に出せるような感性を育む園環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多種の植物や木を植える（保育者や保護者と子どもたちと一緒に植える。） ・動物を飼って感触、重さ、鳴き声、においを感じとる。 ・食べ物を栽培して、みんなで収穫し、調理までできるよう、畑をつくる。 <p>子どもたち同士の関わりを大切にできる園環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然のモノをつかって何かつくれるよう、釘やハンマー、ノコギリなど準備して、子どもが協力して何か制作したり、思い描いているものを表現できるように手助けをする。（丸太、木の板、広いスペース、ひもなど）

注：表4-6の記述は原文のままである。

5. 結論

本研究の目的は、保育内容－表現の『保育内容－表現』の「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業実践を通して、どのような授業を展開していくことが学生の理解を深め、より深い学びとして身についていくのかを、学生への課題からその効果を検討することであった。本研究では第6回、第12回、第13回（振り返り）に「園環境が育む子どもの感性と表現」についての授業を以下の通り実施し、第12回の授業終了後に学生への2つの課題を課し、記述回答を分類・集計し記述内容を分析した。得られた結果の概要は、以下のとおりである。

第一に、課題①の分析の結果、ほとんどの学生が子どもの遊びと空間を捉えている内容の記述を行っており、園庭の環境を理解し、子どもの具体的な遊びをイメージすることができることが分かる。また、学生自身が選んだ場所の理由を明確に述べていたことから、幼児の興味や関心をもつような魅力ある環境を理解していることが伺える。また、課題の発表を通して、同じ場所に対する他者の違った価値観を受け止めていた。これは、幼児が生き生きと自身の体験を通してイメージを広げたり、深めたりして、心の中に豊かに蓄積していくには、保育者が幼児の感じている心の動きを受け止め、共感することにつながると思われる。

第二に、課題②の分析の結果、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な環境の構成について、空間からの視点が深く理解されていることが分かる。自然環境は子どもの豊かな感性と表現を育む上で重要であり、今回の課題②で自然を生かした保育環境の記述が多くあったことは、保育環境を考える視点が身についたのではないかと推測される。

以上のような分析から、本授業を通して、学生が「子どもの感性と表現を育む園環境について」の理解が深まり、授業プログラムの効果が確認された。しかし、授業プログラムの有効性を明示するためには、授業前後の記述内容を比較するなど、更なる検討が必要である。今後、幼児の興味や関心をもつような魅力ある環境を理解し、感性的な出会いの豊かな環境や、思いや意図をもって表現することを楽しめる環境の構成を考えられるような授業プログラムの構築を目指したい。

引用文献・参考文献

川邊貴子、「心をとめる」、小西貴士・川邊貴子、『心をとめて 森を歩く』、東京、フレーベル館、pp.18-21
 小林紀子、「子どもの豊かな感性と表現を育む環境」、平田智久・小林紀子・砂上史子（編）、『最新保育講座

⑪保育内容「表現」』，東京，ミネルヴァ書房，2008，pp. 45-60

砂上史子・小林紀子・石井稔江・松村容子・井口佳子・渡辺英則，「園環境が育む“子どもの感性と表現”」，
平田智久・小林紀子・砂上史子（編），『最新保育講座⑪保育内容「表現」』，東京，ミネルヴァ書房，
2008，pp. 133-167

仙田満，『子どもと遊び－環境建築家の眼』，東京，岩波書店，1992

田代幸代，「進んで戸外で遊ぶには」，川邊貴子・柴崎正行・杉原隆（編），『最新保育講座⑦保育内容「健康」』，
東京，ミネルヴァ書房，2009，pp. 71-81

浜口順子，「領域『表現』と他領域との関係」，無藤隆・浜口順子，『事例で学ぶ保育環境 領域表現』，東京，
萌文書林，2008，p. 31

文部科学省，『幼稚園教育要領 中央説明会（幼稚園関係資料）』，2017 p. 250

